

表 1b 富士山北部地域で記録された蝶類一覧 (補足)

NO. 科・種名	現在の生息状況	備考	調査記録			貴重種など				
			「富士山」 他	環境資 源調査	本調査 記録 データ	環境省 2000	東京西部 1998	埼玉 2002	神奈川 1995	長野 1983
過去富士山の北部以外で記録された種										
ギフチョウ	絶滅?		○			VU				危惧 貴重
シルビ ^ア シジミ	絶滅?		○			CR+EN	EW	EX		危惧
ウラナシ ^ャ ノメ	絶滅?		○			VU				E X
ジョウサ ^ン ミト ^リ シジミ ^{。?}		記録 1 例	□				EW	CR		
記録があるが誤同定と思われる種										
カヒカゲ ^モ ト ^キ	?		?			VU		EX		
ウラジ ^ロ ミト ^リ シジミ	×		?					CR		
ミヤマシ ^ロ チョウ	×		?			VU				貴重
富士山全体で記録された種数			118		123					

- 3 種は分布を拡大してきている可能性が高い。
- e. 迷蝶 (発生地が遠く離れた地点と考えられ北部地域では発生・越冬しないと考えられる種) : カバマダラ 1 種
- f. 絶滅 (過去に確実な記録があるが、現在は北部地域では絶滅してしまったと考えられる種) : ツマグロキチョウ *Eurema laeta etheseba*, オオウラギンヒョウモン *Fabriciana nerippe* の 2 種

今回の調査では、2001 年 8 月から 2002 年 11 月にかけての期間に計 856 件の蝶類のデータを記録でき、記録種数は 76 種 (表 1 の★印) であった。約 1 年間で生息記録種の 64% が記録されたことになる。特に、絶滅危惧 I 類のクロシジミの新産地が発見されたことは大変重要であるといえる。また、1995 年から 7 年間にわたって県内全域を対象として行なわれた「山梨県環境資源調査」でも、過去に記録の少ない種を除く 104 種 (表 1 の☆印) が富士山北部地域で記録されており、近県で絶滅してしまった種も含めて大部分の種がまだ健在であることを示すと同時に、継続した調査の重要性も示唆しているといえる。

富士山北部地域を特徴づける種群とその分布の変遷

富士山には、高山性・亜高山性の種が欠けていることとその原因についてはすでに指摘されているので (高橋 1971, 2002, 清 1988, 渡辺 1989)、ここでは特に扱わず、現在生息する種群について各種の分布図を中心として、その特徴をまとめておく。(編集注: 分布図は印刷の都合で口絵 PL. 10-11 に掲載)

分布図は、今回の「富士山北部地域」を太線で囲い、標高 1,000m 以下の部分が 50% 以上のメッ

シュを黄色で、標高 2,500m 以上の部分が 50% 以上のメッシュを褐色で表し標高の違いによる分布の特徴がわかるようにした。また、過去に記録されたが 1980 年以降記録のないメッシュには赤丸を、1990 年以降記録がないメッシュには黒丸を、1990 年以降の記録があるメッシュには緑丸を入れて分布の変遷がわかるようにした。尚、環境省 RDB 指定種及び近県での絶滅危惧種については、その保護の必要上分布図は「非公開版」のみに掲載した。

a. 草原を中心に生息する種群

富士山の蝶相を特徴づける種群として、まず草原性蝶類が挙げられてきた (高橋 1958, 1971, 2002, 清 1971, 1988, 渡辺 1989 など)。その草原性蝶類に含まれる種の扱いは筆者によって若干の違いがみられたが、高橋 (2002) がその代表的種として挙げたチャマダラセセリ *Pyrgus maculatus maculatus*、ギンイチモンジセセリ *Leptalina unicolor*、ホシチャバネセセリ *Aeromachus inachus inachus*、ヘリグロチャバネセセリ *Thymelicus sylvaticus sylvaticus*、コチャバネセセリ *Thoressa varia*、アカセセリ *Hesperia florinda*、ミヤマチャバネセセリ *Pelopidas jansonis*、オオチャバネセセリ *Polytremsis pellucida pellucida*、ヒメシロチョウ *Leptidea amurensis*、クロシジミ *Niphanda fusca*、ゴマシジミ *Maculinea teleius kazamoto*、ヒメシジミ *Plebejus argus micrargus*、アサマシジミ *Lycaeides subsolanus yaginus*、ミヤマシジミ *Lycaeides argyrognomon praeternsularis*、ヒョウモンチョウ *Brentis daphne rabdia*、ウラギンスジヒョウモン *Argyronome laodice japonica*、オオウラギンヒョウモン (絶滅)、ギンボシヒョウモン *Speyeria aglaja fortuna*、ジャノメチョウ *Minois dryas bipunctata* の

20 種をここでも富士山地域を代表する草原性種としておきたい。

これらには、表 1 に示したように、最近全国的に生息地・個体数ともに減少し、近県では絶滅してしまったと考えられる種や絶滅危惧種に指定されている種が多い。筆者はすでに、北部地域における蝶類群集調査で、草原的環境から疎林そして林縁部分に多くの種が集まり、個体数収容力も大きかったことを指摘した（渡辺 1975）が、これら草原から疎林の環境に生息する種も草原地帯に大きく依存していると考えられる結果が出ているので、「草原を中心に生息する蝶類」として別項で扱うこととする。

b. 富士山に分布を拡大してきている種群

代表的なものとして次の 8 種を挙げておく。各種の分布概要は次の通り。

ウスバシロチョウ *Parnassius citrinarius*

本栖高原ではすでに 1959 年に記録されていたが、それ以外の富士山北部地域には生息していなかったと考えられていた。しかし、1970 年に勝山村小海で記録されたことから桂川沿いに分布を拡大していたことがわかった。その後、富士五湖や周辺山地の山麓でも記録されるようになり、1978 年に富士桜高原で記録され富士山本体に分布を拡大していた事が確認された。その後、山麓一帯に広がり、場所によっては春季最も個体数の多い種になっている。現在もより高標高地帯へ分布を拡大してきており、図からも林道や登山道といったオープンスペースを伝って分布を拡大している様子がうかがえる。

分布拡大の原動力となる成虫の分散力の強さはすでに報告した（渡辺 1982）が、幼虫の食草であるムラサキケマンの分布拡大と環境の変化が相まって分布を拡大していると考えられる。いづれにしても、北部地域では 1970 年以前には 1 メッシュしか記録がなかった種が、約 30 年でこれまでに分布を拡大したのは驚異的である。（PL. 10:1）

クロノマチョウ *Melanitis phedima oitensis*

山梨県でも 1980 年の大発生まで迷蝶と考えられていた種であるが、その後定着した（甲州昆虫同好会 1985）。富士山北部地域でも 1981 年の西湖南岸での記録を初めとして分布を徐々に拡大

してきている。当初越冬は出来ないと考えられていたが、何年もほぼ同じ場所で記録されたこともあるので一部地域では越冬している可能性が高い。これまでの記録地点は溶岩流上での記録が多く、林道などのオープンスペースを伝って分布を拡大しているように感じられる。現在、最も高標高の記録は富士吉田市滝沢林道三合目付近の 1,800m 地点（宮下 2000）である。（PL. 10:2）

ウラギンシジミ *Curetis acuta paracuta*

1966 年に山麓の河口湖町船津で記録されたのを最初に、徐々に分布を広げており、1995 年に降標高 1,000m 以下の山麓では目撃される機会が多くなってきている。おそらく発表されていないだけで、標高 1,000m 以下の地域では夏から秋にかけて頻繁に目撃されていると思われる。標高 1,000m 以上では、富士山精進口一合目付近にまとまった記録がある程度であるが、2002 年鳴沢村奥庭（標高 2,180m）というこれまでの最高標高地点で記録されたことから、分布の拡大は更に進むと考えられる。（PL. 10:3）

ムラサキシジミ *Narathura japonica*

以前は、1959 年に本栖高原、1970 年に足和田村大嵐、1980 年に梨ヶ原で記録されただけで、迷入種と考えられていた。しかし、1998 年に降記録が複数出るようになり、本栖高原・鳴沢林道・梨ヶ原の 3 地域では連続して記録されるようになっていく。鳴沢林道天神峠付近ではミズナラへの産卵行動も観察した（渡邊 1998）り、採集あるいは目撃された個体が非常に新鮮であったことから一部の地域では発生している可能性が高い。今後、気候の温暖化傾向も手伝い、更に分布を拡大するものと考えられる。（PL. 10:4）

ツマグロヒョウモン

Argyreus hyperbius hyperbius

山梨県でも、1999 年までは土着していないと考えられてきたが、2000 年に越冬幼虫が確認され（宮下他 2000）山梨県の土着種に入れられて以来、各地で分布を拡大し、個体数も急激に増加している種である。富士山北部地域においては、1983 年上九一色村逢坂林道の記録が最初であるが、その後点々と記録されてきており、特に 2000 年以降記録が急増しているため、今後も更に分布を拡大し、土着を確かなものとすると考えられる。

現在の最高標高地点は、1998年に広島大学の渡辺一雄先生が記録された吉田口登山道六～七合目獅子岩付近（渡辺 1999）である。（PL. 11:5）

カバマダラ *Anosia chrysippus chrysippus*
ウスイロコノマチョウ *Melanitis leda ismene*
ナガサキアゲハ *Papilio memnon thunbergii*

前述のようにこれまで迷蝶と考えられていた種である。カバマダラは1961年に現在甲州昆虫同好会員になっている梶原正人氏が山梨県で初めて1♂を採集された（甲州昆虫同好会 1985）ものであるが、その後は全く記録がない。ウスイロコノマチョウは、1991年に宮下雅光氏により西湖南岸で秋型1♀が採集されたが、その後北部地域では記録されていない。ナガサキアゲハは、2001年に早見正一氏によって本栖高原で目撃されたのが唯一の記録である。これらは現状では迷蝶および迷入種と考えられるが、前述のように静岡県では、土着あるいは一時的発生が確認あるいは予想されているので、北部地域でも土着は容易ではないと思われるが、更に記録が増える可能性が高い。（PL. 11:6）

これ以外にも、最近の気候温暖化傾向も相まってミヤマチャバネセセリ、ホソバセセリ、ジャコウアゲハ、ゴマダラチョウ、オオムラサキ、ミスジチョウ *Neptis philyra excellens* なども分布を拡大してきている可能性が高い。

c. 里山（標高1,000m以下の雑木林とその周辺の疎林や草地）を主な生息地とする種群

これまで、富士山北部地域においては、これら里山の種は注目されてこなかった。というよりも、記録自体が少なかったのでほとんど論じられなかった。しかし、全国的に減少傾向にある里山の種（多くは絶滅危惧種）がまだ北部地域の一部に生息していることがわかったので、北部地域の蝶をはじめとした富士山城の動植物相の歴史的变化を知る上でも、これからの保護の上でも重要な種群と考えられる。

ここでは、代表的なものとして次の11種を挙げておきたい。これらの種は、これまでほとんど注目されてこなかったが、次の山地帯の種群とともに富士山の蝶類群集を代表する種群と考えられる。前述の草原を中心に生息する種群中のアカセセリ、ミヤマチャバネセセリ、クロシジミ、ゴマシジミ、アサマシジミ、ミヤマシジミ、オオウ

ラギンヒョウモンもこの種群に含まれる。

スジグロチャバネセセリ

Thymelicus leoninus leoninus

前述したが、本種はこれまで御坂・道志山系には生息するが、富士山麓には分布しないと考えられてきた（清 1978）。しかし、今回の北部地域の範囲内で8例が確認された。これらはいずれも標高1,000m以下の地域であり、周辺山地に近い地点が多い。しかし、明らかに富士山溶岩流上の地点でも記録されていることから、精査するとまだ新しい記録が出る可能性がある。分布範囲は近縁のヘリグロチャバネセセリの範囲に含まれ（清 1978）、形態的にもこの種に酷似しているので採集によって確認する必要がある。ヘリグロチャバネセセリ同様草原性の蝶でもある。環境省 RDB 準絶滅危惧種・神奈川県絶滅種。（分布図は非公開版にのみ掲載）

キマダラセセリ *Potanthus flavus flavus*

本種も標高1,100m以下に分布する種で、過去の記録は非常に少ない。それも14地点の中で1990年以降記録があるのは4地点のみで、本栖高原と梨ヶ原周辺地域のみにかろうじて残っているのが現状である。本種も生息環境は草地が中心であるので草原性の蝶といえる。（PL. 11:7）

オオミスジ *Neptis alwina*

ほぼ標高1,000m以下に記録があり、周辺山地の山麓に近い所と富士山麓の低標高地に分布し、これまで環境省3次メッシュで7メッシュから記録された。北部地域で筆者が確認した地点の近くには梅林があったことから、本地域では幼虫は主にウメに依存していると考えられる。近年、神奈川県では絶滅してしまったと考えられている（美ノ谷 2000）。（分布図は非公開版にのみ掲載）

ミズイロオナガシジミ

Antigius attilia attilia

里山の雑木林を代表する種であるが、北部地域では9メッシュしか記録がない。1961年の山中湖村鷹丸尾での記録以来記録が散在するのみだが、1998年には3ヶ所で記録された。これまでの記録は標高1,100m以下である。（PL. 11:8）

コジャノメ *Mycalesis francisca perdiccas*

ゴマダラチョウ *Hestina japonica*

ジャコウアゲハ *Byasa alcionous alcionous*

ジャコウアゲハの1地点以外は、ほぼ標高1,000m以下で記録されている。コジャノメは、1930年の富士吉田市明見での記録以来、4地点が散在するだけだったが、2000年に本栖高原で捕獲確認され北部地域にも健在であることが確かめられた。ゴマダラチョウは、1979年に忍野村忍草で記録されてから、河口湖町船津での記録があるのみで、周辺山地からの飛来個体とそれからの二次的発生と考えられていたが、1996年に富士吉田市土丸尾で目撃されたことから、分布を拡大している可能性が出てきた。ジャコウアゲハは、1968年に本栖高原で記録されていたが、その後は1980年の河口湖町河口湖カントリーでの記録しかなかった。しかし、2001年には、国道139号線の旧道で目撃され、大室山南の軽水林道で死体が採集された(山梨動物生態研究会 2002)ことから、分布は標高1,000m以下の一部であるが、分布を拡大して来ていると考えられる。ジャコウアゲハは、埼玉県の準絶滅危惧種。(PL.11:9)

ヒメジャノメ *Mycalesis gotama fulginia*

ムモンアカシジミ *Shirozua jonasi*

ホソバセセリ *Isoetes lamprospilus lamprospilus*

ツマジロウラジャノメ

Lasionmata deidamia interrupta

ヒメジャノメは、鳴沢村大田和と富士吉田市暮地で記録があっただけだったが、2000年に本栖高原で記録された。ムモンアカシジミは、長い間、1963年に籠坂峠北斜面で1♀が採集されたのが南部地域も含めて富士山では唯一の記録であったが、1991年勝山村で採集され、2001年には富士吉田市域で目撃された。ホソバセセリは、前述のとおり、2002年に本栖高原で採集されたのが唯一の記録である。また、ツマジロウラジャノメは、公式には足和田村根場と鳴沢村大田和で記録されているのみである。両地点ともに、富士山より歴史の古い周辺山地から飛来した可能性も考えられるが、筆者は未発表ながら河口湖町船津の河口湖南中学校付近で採集したことがあり、富士山南側地域では市兵衛沢と二合目林道で記録され(諏訪 1978)、最近でも清邦彦氏が朝霧高原で採集され(高橋真弓・清邦彦両氏私信)、篠田授樹氏が足和田村西湖PICAキャンプ場内で

2001年9月17日に1♀を採集されているので、他にも局所的に分布する可能性がある。これら4種も北部地域ではほぼ標高1,000m以下に分布しているといえる。ムモンアカシジミは、東京都西部の野生絶滅種・埼玉県絶滅危惧I類・神奈川県絶滅種・長野県の貴重昆虫。ホソバセセリ・ツマジロウラジャノメは埼玉県準絶滅危惧種。

(PL.11:10、ムモンアカシジミの分布図は非公開版のみに掲載)

これらの種群は、全て周辺山地に生息しており、後に述べる草原を中心として生息する蝶類の大部分とともに、富士山北部地域の周縁部に残っていた雑木林とその周りの草地に生息していた種群であると考えられる。それが、近年の開発により、複雑な生態系を保ってきた雑木林や草地が分断・破壊され局所的にしか生息できない状況にあるのではないかと考えられる。これらの種の生息地を提供している、現在は辛うじて残っている標高1,000m以下の地域にある温帯広葉自然林(雑木林)とその周辺の草地をセットで保護することは富士北部地域生態系多様性の保護の意味でも大変重要で、この種群は現在最も絶滅危惧の程度が高い種群であると同時に、里山環境の指標種にもなりうると考えられる。

d. 山地帯(標高1,000~1,600m)を分布の中心とする種群

富士山本体の中心的位置を占める山地帯(ブナ帯)に分布の中心があると考えられる種群。その代表的な種を、近縁種を含めて6種について示した。

フタスジチョウ *Neptis rivularis insularum*

富士山が分布の南限にあたり、幼虫の食樹であるシモツケ類が繁茂していても南部地域には分布しない(高橋 1971)。北部地域においても、北部に集中し、東部・西部には少ない。1980年以降記録がない地点が増えており、特に1,000~1,300mの範囲の衰退が激しい。その結果、生息地の分断化が促進されており、林道の舗装化の影響からか個体数も激減しているため、今後保護対策が必要になると考えられる。東京西部の野外絶滅種。(分布図は非公開版のみに掲載)

ヤマキチヨウ *Gonepteryx rhamni maxima*

本種も山地帯に広く分布し、幸いにして 1990 年以降記録のある地点が大部分を占めている。しかし、記録データの半数以上は越冬個体の記録で (119/218)、渡辺 (1989b) で指摘したように、本種は越冬を低標高地で行ない、越冬個体の長距離移動によって北部地域の広い範囲で発生をしている可能性が高く、越冬後もあまり汚損していないので目立ち確認され易くなっていると考えられる。発生地は、食樹クロツバラの分布によって限定されていると考えられるので、主要発生地は多くないと思われる。また、埼玉県の絶滅種、神奈川県絶滅危惧種、環境省の準絶滅危惧種になっているので、このような主要発生地の保護は大変重要と考えられる。(分布図は非公開版のみに掲載)

サトキマダラヒカゲ *Neope goschkevitschii*

次種と別種であることが判明 (高橋 1970) して標本記録の再検討がなされた。その結果、次種よりやや標高の低いところを好む傾向があるとされた (高橋 1971) が、ほぼ 700~1,500m の範囲に分布し、次種と混生している所もあることがわかった。しかし、図を作成して驚いたが、1980 年以降記録がない地点がほとんどとなってしまっていて、辛うじて標高 1,000m 以下に 3 ヲ所記録があるだけだった。最近本種をメインとした調査が行なわれていないこともあるが、もともと次種に比べ幼虫の食樹がタケ科植物に限られることから、分布は局所的で個体数も多くなかった。そのため、生息地が急激に減少している可能性も高い。ブナ林の林床に多いミヤコザサやスズタケに依存してブナ林では再確認される可能性はあるが、全域での確認調査が急務である。(PL. 11:11)

ヤマキマダラヒカゲ

Neope nipponica nipponica

前種に比べて標高の高いところに集中し、北部地域でも北西部の中腹に多く、ミヤコザサやスズタケの多い地域と一致する。本種は前種が食草としないススキも食草としているので分布はより広いと考えられがちであるが、標高 1,800m 以上にも 900m 以下にも記録がない。まさに富士山の山地帯の蝶である。(PL. 11:12)

ウラギンヒヨウモン

Fabriciana adippe pallescens

過去には、富士山麓では個体数が多いといわれていた (高橋 1987) ので、富士山の至る所にいるように感じていたが、分布図をつくってみると記録のない所もかなりあることがわかった。本種は次種に比べ、山梨県内でも甲府盆地周辺など標高の低いところでも記録されているが、北部地域においては、標高 1,000m 以下からは記録があまりない。標高 1,000~2,500m の範囲でも周辺部では 1980 年以降記録がない地点が増えている。個体数の減少も顕著で、林業の不振で伐採地が減少し幼虫の食草であるスミレ類が少なくなったことや林道の舗装化が影響しているのかも知れない。(PL. 11:13)

ギンボシヒヨウモン

Speyeria aglaja fortuna

前種に比べて標高の高い地域に多い傾向があり、標高 900m 以下には記録がない。前種同様幼虫がスミレ類を主な食草としており、特に本種は、富士山地域のスミレ類の中で最も多くみられるタチツボスミレを好むので、伐採地などの開けた草地に多い。過去には伐採地で最も個体数の多い種であったが、近年個体数の減少が顕著である。それゆえ、1990 年以降記録がある地点でも、今後記録されなくなる可能性も高い。周辺部では 1980 年以降記録がない地点が増えているのも、それを示唆している。(PL. 11:14)

以上代表的な 6 種を挙げたが、これ以外にも渡辺 (1989) で指摘したフジミドリシジミやメスアカミドリシジミをはじめ、本地域を代表する種はまだかなりあると思われるが、北部地域で記録された全種の分布変化を精査しないとはいきりしたことはいえない。しかし、これら 6 種の分布変化からだけでも、富士山北部地域の中心である山地帯にも衰退傾向の種があることが示された。今後、自然林の面積変化やその植物相の変化、林業の不振による人工林施業の変化や林道の舗装化などが、富士山の中心的位置をしめる山地帯蝶類群集にどのような影響を与えているのかを調査して行く必要を強く感じる。

最後になったが、今回のまとめについて有益なコメントを頂いた日本鱗翅学会会長高橋真弓氏に深謝したい。

文献

- 早見正一(2002)富士山に入れなかった蝶(十入りつつある蝶). 2002年日本鱗翅学会関東支部秋の集い講演要旨: 2.
- 入交修・山野裕忠(2002)静岡県遠州灘にて初めて発生が確認されたカバマダラの記録. 駿河の昆虫(197): 5511-5513.
- 北原正彦(2002)富士山の蝶類相の特徴とその保全. 山梨県環境科学研究所富士山シンポジウム2001報告書: 17-21.
- 甲州昆虫同好会(1985)山梨の蝶. 160pp. 山梨日日新聞社.
- 美ノ谷憲久(2000)神奈川県から絶滅した蝶たち. かながわの蝶. 神奈川新聞社: 57-60.
- 宮下泰典(2000)1997, 1998年クロコノマチョウの記録. 山梨の昆虫(44): 1180.
- 宮下泰典・白須英樹・渡辺通人(2000)県内でツマグロヒョウモン幼虫の越冬を確認. 山梨の昆虫(44): 1170-1171.
- 清邦彦(1971)富士山周辺における草原性蝶類の分布とその歴史的成立. 昆虫と自然6(9): 7-11.
- 清邦彦(1978)静岡県および山梨県のスジグロチャバネセセリ属. 駿河の昆虫(100): 2922-2928.
- 清邦彦(1980)富士西麓5月中旬の蝶. 駿河の昆虫(110): 3250-3251.
- 清邦彦(1988)「富士山にすめなかつた蝶たち」. 築地書館, 180pp.
- 諏訪哲夫(1978)静岡県・山梨県のツマジロウラジヤノメ. 駿河の昆虫(100): 2945-2953.
- 諏訪哲夫(1981)山梨県鳴沢村でカラスシジミを記録. 駿河の昆虫(113): 3351.
- 高橋真弓(1958)富士火山における蝶類分布とその生物地理学的意義について. 生態昆虫7(1): 5-13.
- 高橋真弓(1970)日本産キマダラヒカゲ属 *Neope* に属する二つの種について. 蝶と蛾(日本鱗翅学会会誌)21: 17-37.
- 高橋真弓(1971)富士山の蝶類. 「富士山」富士山総合学術調査報告書. 富士急行: 966-983.
- 高橋真弓(1987)静岡県および山梨県南部におけるヒョウモンチョウ類の分布と生息地II. 駿河の昆虫(137): 3959-3987.
- 高橋真弓(1989)静岡県および山梨県南部におけるセセリチョウ科3種(ホソバセセリ, オオチャバネセセリ, ミヤマチャバネセセリ)の分布と採集記録. 駿河の昆虫(148): 4229-4252.
- 高橋真弓(2000)2000年静岡県におけるナガサキアゲハの採集・目撃記録. 駿河の昆虫(192): 5375-5376.
- 高橋真弓(2002)富士山の蝶類. 「富士山の自然と社会」. 国土交通省中部地方整備局富士砂防工事事務所: 129-139.
- 高橋真弓・諏訪哲夫(1990)故稲葉茂氏所蔵蝶類標本目録の発行について. 駿河の昆虫(149): 4255-4283.
- 竹内克弥(1999)浜松市中田島町におけるカバマダラの記録. 駿河の昆虫(187): 5254.
- 渡辺通人(1975)富士山北部における蝶類の群集構造に関する研究. 1. 1973年度の個体数調査結果. 駿河の昆虫(90): 2623-2641.
- 渡辺通人(1982)蝶類の個体群構造に関する研究. 2. ウスバシロチョウ地域個体群の環境選択と分散について. 山梨の昆虫(17): 409-433.
- 渡辺通人(1989)富士山の蝶類. 富士箱根国立公園管理官事務所資料. 環境庁.
- 渡辺通人(1989b)ヤマキチョウ属についての疑問. 日本の生物3(3): 61-68.
- 渡邊通人(1996)昆虫群集について考える—富士山昆虫群集の構造を考えるための試論—. CETTIA(山梨動物生態研究会会誌)(8): 1-8.
- 渡邊通人(1998)山梨県のチョウ相の変化からみた温暖化傾向. 昆虫と自然33(14): 11-12.
- 渡辺通人(1999)県内におけるツマグロヒョウモンの未発表記録. 山梨の昆虫(43): 1130.
- 渡辺通人(2002)これまでに確認された種類. <山梨動物生態研究会編「富士北麓の動物調査」富士山北麓の蝶類のリスト表>. FAUNA(山梨動物生態研究会会誌)2002年6月号: 19-20.
- 山梨動物生態研究会(2002)富士北麓の動物調査. FAUNA(山梨動物生態研究会会誌)2002年6月号: 1-22.

RDB(レッドデータ資料)

- 環境省RDB: 生物多様性センターHP
- 東京都環境局HP「東京都の保護上重要な野生生物種-1998年版-」
- 埼玉県HP「改訂埼玉県レッドデータブック動物編(2002)」
- 神奈川県立生命の星・地球博物館(1995)神奈川県レッドデータ生物調査報告書. チョウ類.
- 長野県公式HP: 「長野県の貴重昆虫(1983)」